

## 日本語から言語哲学を見直す

飯田 隆（慶應義塾大学）

20世紀の言語哲学の歴史の中で日本語が問題となったことは、これまでなかったわけではない。クワインが「存在論的相対性」という論文の中で、日本語の「三頭の牛」のような「数詞＋分類辞」という表現について論じているからである。クワインの議論は、日本語の名詞はすべて質量名詞であるという「質量名詞仮説」と呼ばれる仮説まで生み出した。しかし、日本語で数詞とともに使われる表現を丁寧に見てみるならば、こうした仮説が正しくないことがわかる。日本語において「加算／非加算」や「単数／複数」といった区別がどうなっているかを考えることは、指示や述定といった言語哲学の基本概念を再検討することにつながる。このことは、これまでの言語哲学が根本的に間違っていたということを示すものではない。むしろ逆に、日本語のような言語を扱えるようになるまで言語哲学が成熟を遂げたということである。